

西域出土の唐代の幡について

相 模 泰 造

〔抄 録〕

西域出土の唐代の布製幡について、幡頭の形状、素材となる繒、綾、錦などの織物としての特徴、および生産地域を明らかにする。そのうえで唐代の幡の実例としてスタインおよびペリオ将来の敦煌出土幡を取り上げ、多種の織物の組み合わせや、部位による使用織物の違い、技術を考察する。終りに、唐代の染織技術を知る手がかりとして行った大谷探検隊将来のアスターナ出土の織物残裂2点の熟覧調査から得られた知見をまとめる。

キーワード 幡、唐代織物、スタイン、ペリオ、大谷探検隊

1. はじめに

仏教荘厳具の一つである幡の素材は、ほとんどがシルク、麻、羊毛などの天然有機高分子化合物で構成されている。そのため、時間経過による崩壊を免れ得ず、多くの幡が遺失してしまい、研究上の阻害要因になっている。このため、従来の研究は考古学的あるいは染織史的研究に中心がおかれ、優れた著作が多数発刊されている⁽¹⁾。しかし、これらの先行研究は、考古学、染織史の観点からの論述が中心で、幡に使われる織物の種類、生産や用途についての研究には不十分なところが多い。

そこで、本稿では、繊維関連業務で培った筆者の経験⁽²⁾にもとづき、まず、幡の素材としての織物に注目し、織物の特徴や織物生産体制について考察を加える。そのうえで、唐代の幡および織物残裂を調査して得られた知見をまとめる。

本稿で調査対象としたのは、英国スタイン⁽³⁾将来の敦煌出土の幡2点、同じく敦煌出土の仏国ペリオ⁽⁴⁾将来幡1点と、大谷探検隊⁽⁵⁾将来のトルファン出土の織物裂2点である。そのうち、敦煌出土の幡3点は図版による調査を行い、大谷探検隊将来の織物裂は実物の熟覧調査をした。調査手法は、図版と実物のいずれについても、織物分解用拡大鏡、顕微鏡の肉眼視、およびコンピュータの画像解析によって得たデータを用いた。

なお、本稿で『大正新脩大蔵経』を引用する場合、煩雑を避けるため、例えば『大正新脩大蔵経』第50巻、284頁の上段・中段・下段の場合は、(大正50、284上・中・下)と表記する。ま

た、漢字の字体は、一部の固有名詞などを除き、当用漢字とする。

2. 幡の語源・用途・形状について

幡の語はサンスクリット語で旗を意味するパターカー(patākā)に起源を持つ⁽⁶⁾。また、サンスクリット語のドヴァジャ(dhvaja)も旗の意で、「幢」と訳される。両者を熟して「幢幡」あるいは「幡幢」ということもある。なお、「幡」の英語訳は「banner」、仏語訳は「la bannière」、独語訳は「die Fahne」である。

人類史上いつ頃から幡およびその原型である旗を用いるようになったかは明らかでないが、人・王・文物等の存在や行為の所在を告知する目印として使用され始めたと考えられている⁽⁷⁾。

仏教においても幡が取り入れられ、釈尊や弟子たちによる布教遊行や教線拡大の途上で、前述のように、存在・行為の告知および仏教に対抗する六師外道等に打ち勝つ優位性を誇示する目的で使用されたと考えられている⁽⁸⁾。さらに時代が降るにつれ、釈尊の遺徳への念⁽⁹⁾や降魔・供養・廻向・功德・荘厳などに活用されたことが文献⁽¹⁰⁾で確認できる。仏教東漸に伴い、幡もパミール高原を超え、西域地方、中国を経て、朝鮮半島、日本に伝えられた。

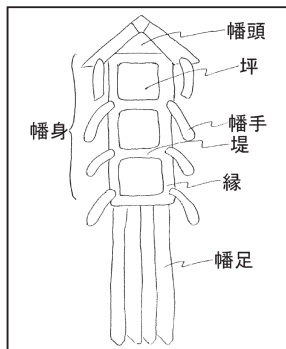


図1 唐代典型的幡の各部名称



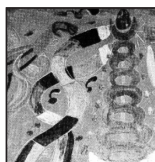
図2 東大寺聖武天皇祭の懸幡

唐代の幡の典型的な形態(図1)は人体を模したものだといわれ、頭・身・手・足を備えている。しかし、この図は典型を示したもので、手足のないもの、身が一坪のものなど変形も多く見られる。東大寺聖武天皇祭を荘厳するための懸幡(図2)は唐代の幡の典型的形状である。

敦煌莫高窟の壁画や出土絹本画に描かれた幡の形状を観察すると、幡頭に時代による形態の変化が看取できる⁽¹¹⁾。例示すると(図3)、古く北魏代は幡頭がなく、北周代では長方形、隋代では縦長の二等辺三角形である。唐代に至ってほぼ正三角形となる。この、幡頭が正三角形を



北魏 敦煌莫高窟第257窟



北周 同第428窟



隋 同第305窟



唐 引路菩薩図

図3 幡頭形式の歴代変化

しているのが唐代の幡の特徴といえよう。

3. 唐代幡に使用された織物と唐代の織物生産地

3.1 唐代幡に使用された織物

現代の繊維工学では、織物の組織(経糸と緯糸の関わり方)は、平織、綾織、緞子織(朱子)、振り織の4種に分類されている。唐代を含む古今東西のすべての織物はこの4種の組織かその応用組織で成り立っている。これら4種の代表的な織物組織図と実態図を図4に示す。

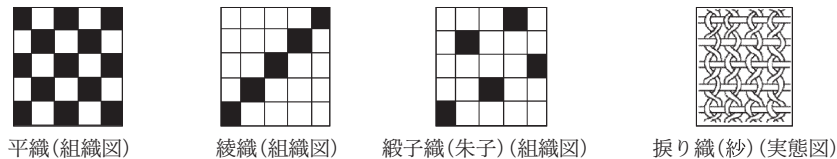


図4 織物組織図・実態図

織物組織図では、上下方向が経糸、左右方向が緯糸を表す。実際の製織では事前に織機に仕掛けた経糸に対し、緯糸を組織図の下方から上方へと順次挿入する。平織、綾織、緞子織(左側3種)の組織図では、■は糸が織物表面に出ており、□は糸が織物裏面に出ていることを示す。振り織(最右)は織物内での糸の構成状況を示した実態図である。

唐代の繊維・織物の一部は、その名称と意味が現代とは異なっているので、注意が必要である。例えば、後述するように「絹」は唐代ではシルク織物のうちやや厚手のものを指すが、現在使われている「絹」は「絹繊維」および「絹織物」全般を指す。この違いを明確にするため、以下、現在の「絹」の意味を表す場合は「シルク」と記す。また、唐代では「綿」はシルクの真綿(まわた)を意味し、現在の植物繊維である木綿(もめん)とは全く異なるため、植物繊維の綿については「木綿」と表記する。なお、唐代には中国本土では木綿の栽培は行われておらず、梅方樞⁽¹²⁾によれば、広東(海南島)と広西の一部、雲南では紀元前1世紀に綿(木綿)を紡ぎ、布を織り、新疆では6世紀以前に綿作が始まったといい、綿作が華南から長江流域に広がったのは13世紀始めであるという。したがって、唐代の繊維製品のなかに木綿があれば、西方や南方の産品であったと考えられる。

次に、唐代の繊維・織物の名称と語義について、文献をもとに整理しておきたい。定義を含む語義、および幡との関係を明らかにするために、ここで考察の対象とした基本文献は、慧琳編『一切経音義』、希麟編『続一切経音義』、『義楚(釈氏)六

分類	項目数	繊維・織物名
シルク関係	35	蚕、繭、絲、線、絁絲、繒、絹、純、素、綺、縠、綺縠、紗、羅、輕容、綾、紋、錦、緞子、緞、緯絲、繡、練、絨、縵、縑、縞、綃、紵、綿、油衣、綿、紬、緝、績
植物繊維関係	12	麻、紵、紵麻、布、質布、麻布、紵布、白絲布、葛、葛布、木綿、藕絲
毛関係	5	毛織、氈、褐、兔褐、地毯

表1 繊維・織物名

帖』、『大唐六典』、『倭名類聚抄』である⁽¹³⁾。さらに、各種辞典類も参照した⁽¹⁴⁾。その結果、輻輳を除いた繊維・織物名数計52項目をシルク、植物、毛繊維別に纏めると(表1-前頁)のようになる。

これらのうち、幡の素材として重要な絲・繒・絹・紗・綾・緞子・錦・麻・毛織の8項目について、その詳細および筆者の見解をまとめると(表2)のようになる。表中の文献、辞典類は前記注⁽¹³⁾、⁽¹⁴⁾を参照。

項目	詳細および筆者見解
絲	『倭名類聚抄』巻14に「絲蚕所吐也」、『一切経音義』巻45に「蚕在繭中此即野蚕也用野蚕絲綿作衣」 ⁽¹⁵⁾ とある。 これはすなわち、蚕が糸を吐いて作った繭からその糸を繰り出して作った絹糸(シルク・ヤーン)のことである。 同じく繭から真綿を経て作る紬とは区別される。
繒	『一切経音義』巻20には「繒帛之総名也」 ⁽¹⁶⁾ 、巻42では「帛之輕者惣(繒)名也」 ⁽¹⁷⁾ とあり、布帛の総称、あるいは軽くて薄い布としている。 織組織は平織である。幡においてはあらゆる部位の素材となりうる。
絹	『中国歴代服装、染織、刺繍辞典』によれば、白繒となり、経糸緯糸とも生糸で、平織またはその変化組織のシルク織物であるという ⁽¹⁸⁾ 。 今日いうところの「絹」は、精錬後の白く光沢があり地風が柔らかない布帛を指すことが多く、「絹」一字では、蚕糸とそれで作られた布帛、およびシルク製品全体を指すことが多いので注意が必要である。
紗	『統一切経音義』巻5には「似絹而輕者也」 ⁽¹⁹⁾ 、『倭名類聚抄』巻12には「紗似絹太輕薄也」とあり、薄物の絹のこととする。『新唐書』 ⁽²⁰⁾ 土貢品の項には平紗、花紗(花紋のある紗)の名が挙げられている。また、『中国織繡服飾全集』には経・緯糸の撚数が少なく、織目は疎く、その糸隙間は均一な薄い織物としている ⁽²¹⁾ 。 今日の紗とほぼ同じで、紗織の薄絹である。幡では幡身に使われることがある。
綾	『一切経音義』巻66に「綾似綺而細也」および「布帛之細者曰綾也」 ⁽²²⁾ とあり、綺 ⁽²³⁾ に似ているが細かい布帛を綾というとしている。『中国織繡服飾全集』によると、織物の表面には畳状の山形斜線があり、唐宋代に最盛期を迎えたという ⁽²⁴⁾ 。 今日の綾は無地柄のもの(例えば、ズボン地、デニムなど)が多いが、唐代では綾組織をベースに多彩な柄を表現した文柄織物(文織)が多い。幡の素材として多用され、幡頭や幡身の素材となっている。
緞子	『一切経音義』、『統一切経音義』には記載がない。『中国織繡服飾全集』によれば、織物の経糸あるいは緯糸のいずれか一方の糸を定められた点で上下に交叉し、交叉点以外は織物表面に糸を浮かしている織方であり、織物表面には光沢があり、唐代には緞子の錦が織られていたという ⁽²⁵⁾ 。 幡では緞子組織をベースとした錦が、幡頭や幡身の重要部分に使われている。なお、我が国では縹子あるいは朱子(シュス)とも呼ぶ。
錦	『一切経音義』、『統一切経音義』には記載がない。『中国織繡服飾全集』によれば、錦は多彩な柄織物で最も絢麗華美なものであり、経糸で柄を出す経錦と緯糸で柄を出す緯錦があり、漢代は経錦が多く、唐代に至り大きな柄を織り出す緯錦が盛んとなり、特に花鳥柄のものが優れているという ⁽²⁶⁾ 。 錦には大別して「経錦」と「緯錦」がある。技術的には経錦が先に開発され、その後、緯錦が開発された。「経錦」は比較的簡単な構造の織機で2～4色の経糸で文様を織り出すため

	文様の柄や大きさに制限がある。「緯錦」は多色の緯糸を使い複雑な構造の織機(例えば、空引き機 ⁽²⁷⁾)で織り出すため、多色で大きく複雑な文様が製織できる。後述するように(本稿4.および5.参照)、錦は豪華絢爛な素材として幡の重要部分である幡頭や幡身に多用されており、西域出土幡にも使用されている。
麻	『義楚(釈氏)六帖』巻23に「以麻統線」とあり麻をつないで糸にしたものであるという。麻には大麻と紵麻がある。大麻繊維には大麻の草茎の皮部分を剥いて作る靱皮繊維が多い。唐代西域出土幡には麻布のものが幾つかある。
毛織	『一切経音義』巻92に「尚書云。毛更細毛也。説文毛獸細毛織成衣也。」 ⁽²⁸⁾ 、巻100に「詩伝云。褐毛布然馳毛織為衣也。」 ⁽²⁹⁾ とあり、細い毛を持つ獣類から取った細毛で織った織物としている。 『新唐書』土貢品の項には毛織は無く、西域から移入された織物であろう。幡の用例が西域出土品にある(本稿4.3参照)。

表2 繊維・織物の詳細

3.2 唐代の織物生産地

唐代の織物産地に関しては、佐藤武雄の詳細かつ綿密な研究があり、その著書『中国古代絹織物史研究』下巻⁽³⁰⁾に成果がまとめられている。しかし、佐藤の研究は対象がシルク織物に限られており、幡との関係は全くふれられていない。そこで、幡に使用可能な他繊維・織物の産地について、『新唐書』地理志⁽²⁰⁾に記載の繊維や織物関係土貢品と、西域地方の繊維・織物産地について、玄奘の『大唐西域記』⁽³¹⁾に記載されている西域の繊維・織物を調査した。

まず、『新唐書』巻27〜43地理志に記される土貢品では、唐十道の総州数347州のうち、繊維・織物関係の土貢品が課せられた州は、全州のうち167州(48.1%)であったことが分かる(表3・図5)。

州数 道名	道内 全州数	繊維関 係州数	繊維関係 州比率	綾・錦 産出州数
関内道	33	12	36.4%	0
河南道	30	27	90.0%	8
河東道	22	6	27.3%	0
河北道	30	20	66.7%	5
山南道	36	25	69.4%	4
隴右道	20	3	15.0%	1
淮南道	12	12	100.0%	1
江南道	51	31	60.8%	7
劍南道	39	9	48.7%	4
嶺南道	74	12	16.2%	0
合計	347	167	48.1%	30
西域		8	—	0

表3 唐代繊維産地

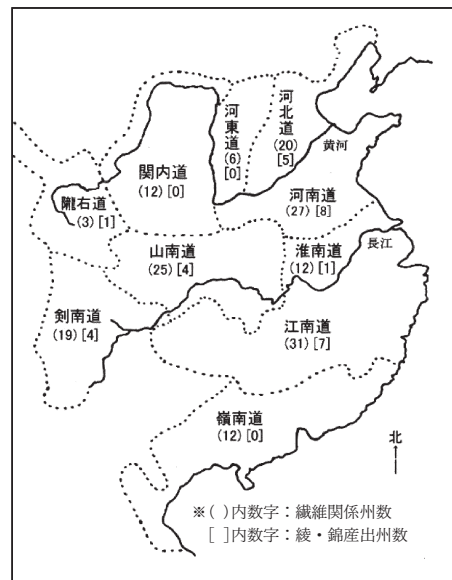


図5 唐十道図

特に、河南道、河北道、山南道、淮南道、江南道では、道内の州数に占める繊維関係の土貢被課州の割合が何れも50%を超え、主要産業であったことを窺がわせる。また、高級織物であり、幡を飾ることの多い綾、錦の産地は7道30州を数え、漢代からの製織技術革新が唐代に至り百花繚乱し⁽³²⁾、河南道、江南道を中心に緯錦を主とする高級織物の生産体制が確立していたことが窺える。一方、西域での繊維関係記事がみえる国と地域は、『大唐西域記』では阿耆尼国(氍、褐。以下括弧内は繊維関係産物を示す)、屈支国(褐)、跋禄迦国(細氍、細褐)、素葉水域(氍、褐)、窣利(氍、褐、氍)、商彌国(氍、褐)、瞿薩旦那国(毼、細氍、純紬)である。シルクの純紬は、蚕種移入伝説で知られる瞿薩旦那国(現コートン)のみで、他の国・地域は毛製品で占められている。

4. スタインおよびペリオ将来 西域出土の唐代幡

スタインおよびペリオが敦煌莫高窟から将来した唐代の幡は、図版が公開されているものだけでも残欠の裂を含み、170図にものぼる。そのうち、本稿では繒・綾・緞子・錦など、幡に多用されている織物組織を含み、品質的に普通品・上級品・秀品に分類できる典型的代表品であり、かつ、残存状態が良好で原姿が窺える3点を選び、考察の対象とした。

4.1 「彩繒幡」(図6)

スタイン将来 大英博物館登録番号 MAS886

スタインの報告書『セリンディア』の総解説文⁽³³⁾に、敦煌千仏洞の唐代の石窟からの出土と記すが、どの窟かは明らかでない。具体的な重量の記載はないが、薄くて軽いとしている。幡の長さは4フィート6インチ(約147cm)、幅10インチ半(約27cm)としている。

この幡についてスタインを含めた先行研究⁽³⁴⁾では、素材がシルクであるとししか述べておらず、品質特性に触れていない。しかし、写真図版で詳細に観察すると、本幡に使用されている布は幡頭、縁、坪ともシルクの平織りであり、「穀」のようなシボがなく、スタインは薄くて軽いと記しているのも、「繒」に該当する布である。

幡頭部(図7)にはレンガ色の縁が付属し、中央部で縫い合わせてある。レンガ色への染色方法については先染か後染の判断は図版からは出来ない。拡大した図版を織物観察用ルーペで観察した織密度⁽³⁵⁾は経糸が約22本/cm、緯糸が約25本/cmである。糸の具体的な太さは図版の観察からは測定できなかった。縁に囲まれた

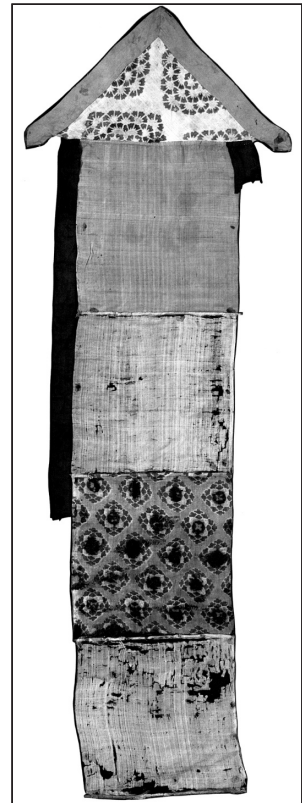


図6 彩繒幡

幡頭中心部の織物は、白地に花卉柄を夾纈染⁽³⁶⁾したと見られる方形の布で、三角形に切断して裏表を構成し、縁に縫い付けられている。織密度は経約20本/cm、緯約22本/cmで縁よりは粗い。

坪は4区画に別れる。最上部の第1坪はレンガ色に、第2坪(図8)と第4坪は極淡黄色に後染めしたものである。これら3坪の素材は、経糸の斑(ムラ)の大小が似ており、しかも織密度が経約26本/cm、緯約5本/cmと共通することから、同じ布を染め分けたものと思われる。第3坪は紅色の地に花卉柄を配しており、これも幡頭と同じく夾纈染で染めたものとみられる。ただし、幡頭の花弁図布と比べると、使用糸が太く織密度は経約21本/cm、緯約27本/cmで幡頭に近いものであるが、糸が太いため厚手になっているとみる。

坪の左右の縁には濃紺色の繪が縫い付けられている。この縁には一見文様が織り込まれているように見えるが、文様間の境が明確でなく、また一つの紋様の大きさが織り技術からして大きすぎることから、恐らくは汚れや皺が文様のような感じだけであろう。縁の織物密度は布の色が濃く観察できない。

坪と坪の間は袋縫いで繋げられており、スタインは袋縫い部分に薄い竹籤(ヒゴ)が挿入されていると記録しているが、確かに図6の右側の坪縁が欠落している部分の、第1坪と第2坪の右端に竹籤が確認できる。図版からは第4坪以下に更なる坪や幡足等があったかについては判断できない。

この幡全体の特徴をみると、幡身布に、糸斑や織斑があり、高品質のものではない。しかし、幡頭の布は幡身の布に比べると織目が整い、織斑もなく、比較的優れた品質の布を使っている。色構成、柄構成からみて材料の布を少しでも良く映えさせるよう工夫はされているものの、地味な幡であることは否めない。よって、身分の高い有力者が献じるような豪華な幡でなく、一般庶民が個人ないしは複数で廻向や功德を願って奉納したものと推測できる。

4.2 「描彩繪幡」(図9)

ペリオ将来 ギメ美術館登録番号 E0. 1399 (P. 112)

ペリオの『敦煌の幡と絵画』⁽³⁷⁾に記載される菩薩像幡。同書解説では、保存状態は良好で、一枚の平シルク布の上に多色に彩画された唐代の幡としている。高さ80cm、幅17.5cm。

本幡は、幡頭の形状が、三段の縁の上にほぼ正三角形に描かれ、頂角がとがっており、唐代幡の形態的特徴を示している。1枚の布に幡頭・幡身等を描いたもので、幡身は1坪で縁は描いていない。また、坪の左右の縁および幡足は付属しない。

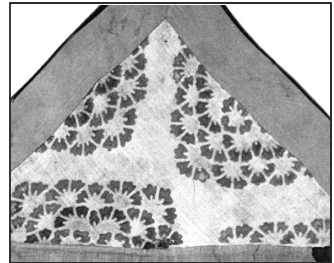


図7 幡頭部

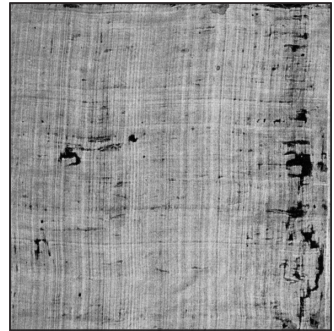


図8 幡身部 第2坪

画像を拡大して観察したところ、織組織は平織、使用糸はシルク無撚糸である。織密度は経約40本/cm、緯は二本引揃え約30本/cmであることから、比較的厚みのある繒のようなものである。糸の太さは観察できなかった。布としては錦ほどの最上品ではないが、全体を明るい色相で描き、上部の雲気と足元の蓮台には装飾性があり、上下の縁の模様も幾何学的で、画家の優れた技術と工夫を良く表わしている幡である。彩画された三角形の上2辺外側には、彩画されていない部分が辺にそって残され、後から幡頭縁を取り付ける得る状態になっている(図10)。ペリオによれば保存状態は良好とのことであるから、未完成の状態で留保されていたものであろう。ペリオの収集品にはこの幡と同類の幡が7点含まれており⁽³⁸⁾、いずれも幡頭の縁が付属していない未加工品の同類幡が複数あるということは、唐代の敦煌において、未加工幡を備蓄し、寄進者の意向を受けて別材の縁などを縫い付けて、短納期で納品可能な効率的供給システムが存在したことが推測される。この幡は品質的に見て中位の上級品である。大きさからして、堂宇内あるいは窟内の荘厳用と推測する。

4.3 「錦幡頭幡」(図11)

スタイン将来 大英博物館登録番号 MAS886

『セリンディア』の解説文⁽³⁹⁾によると、幡身は3坪から成り、第3坪は赤色の羊毛または木綿の綾である。同書には全体の長さは4フィート3インチ(129.5cm)、幅6インチ(15.2cm)としているが、幅は図版から計測換算すると約11インチ(約28cm)とみられる。

図版を詳細に観察すると、幡頭は各種織物を縫い合せ、第1坪は赤色、第2坪は白色、第3坪は赤色で、これに青色の幡手と幡足が付属している。

幡頭は5種の布を縫い合わせて構成している(図12)。(a)頂上の吊布は幡手と同じ青色の繒である。(b)右側の縁は緑色の繒で平織りである。(c)左側の縁は濃紺・赤・白・草色の4色で花文様を織り出した緯錦で、同じ布を緯糸方向に裁断した断片を2枚縫い合わせて構成している。裁断片を縫い合わせて幡頭部分に使う例は、錦のような高級織物ではロスを減ずるためや、デザイン上の配慮から縫製工程で時々使われる技法で、その結果、左



図9 描彩絵幡

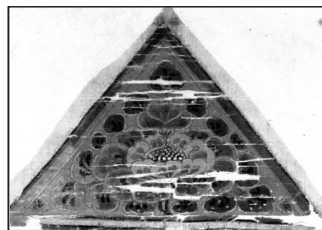


図10 幡頭部分

上と右下では柄がずれている。幡頭中央部の2枚の布のうち、上部(d)は緯錦で、青緑と赤の2色で文様を織り出している。下部(e)は白地に若草色で縁取った紅色の花紋と、その周りの空間を菱形に取り囲む紅色の小四角形を織り出した経錦である。各布は隣同士やや太い縫い糸で丁寧に縫い合せている。これら錦は文様を明確にするため陰糸と呼ばれる糸を加え、表からは見えないように織り込む複雑組織⁽⁴⁰⁾を構成しているの、織密度は図版からは観察しがたい。各部のうち、品質を考える上で重要なのは(c)と(d)と(e)で、3種類の高級な錦を使い豪華さを表現している。

幡身の各布および幡頭、幡足とのつなぎ目は袋縫いで、その中に竹籤(ヒゴ)が入っている。第1坪の青色布は、一見すると紗のようであるが、精査すると織密度は経約23本/cm、緯約32本/cmであることから薄手の縐であることが判明する。第2坪の白色布は菱形文様を織り出した織目の込んだ緞子である。この部分については、白色のため図版からは織密度は明らかにしがたい。第3坪の織密度は経約25本/cm、緯約21本/cmで糸も太く、赤色に染めた厚めの綾である。この綾織物について、スタインは、繊維素材は羊毛または木綿とし、断定していない。一般に、木綿糸と羊毛糸の違いは顕微鏡観察で容易に判定できるが、スタインの文献には顕微鏡観察の記録は無い。ただし、目視でも木綿糸は斑が少なく、撚数が大きく、羊毛糸はその逆であることで判別できる⁽⁴¹⁾。そこで、図版を詳細に観察すると、糸の斑が大きく、また撚がやや甘いことから羊毛と推定できる。幡手は右側のみが残る。幡足は上部と下部で別の布を使い、縫い合わせており、そのうち下部は1枚の布の上下部分を残して切れ目を入れて3本にし、切れ目部分がほつれないよう縫い糸でかがるといふ高度な縫製の配慮がみられる。幡手、幡足下部とも使用布は同種の、織密度が経約25本/cm、緯約34本/cmある厚めの縐で、青色に染めている。

この幡は小品であるが、素材にシルクと羊毛の2種をふくんでおり、また、織物組織からみた場合、平織・綾・緞子・緯錦・経錦と変化に富んだ組織の高級な織物を集めており、唐代の製織技術の優秀さを表す幡といえる。仕立ても丁寧であり、優れた縫製技術を示している。このように品質の高い秀品であることから、身分の高い裕福な信者層からの寄進で

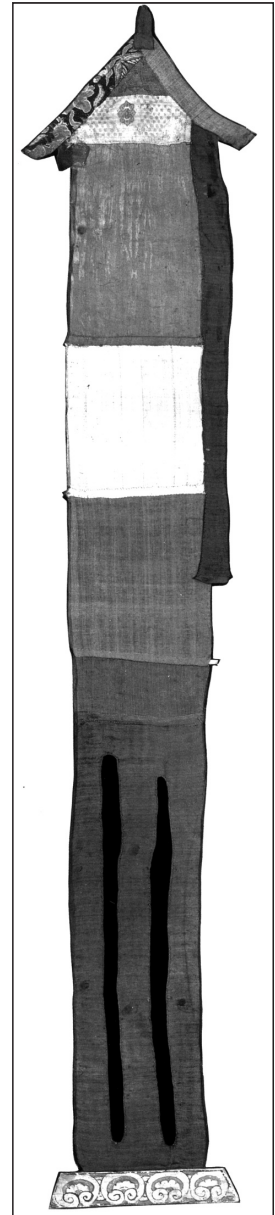


図11 錦幡頭幡

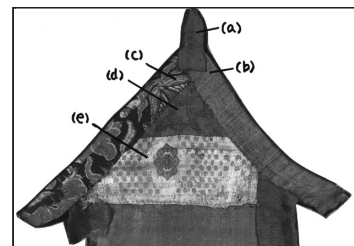


図12 幡頭部分

あったと想定される。

以上、唐代幡の代表例として敦煌出土の幡3点について、品質に注目して見てきた。その結果、敦煌の唐代幡は、素材織物、縫製方法、デザイン等がバラエティに富んでおり、需要に応じた高級品から一般品までに及んでいること、なかには高度な縫製技術がみられることが確認できた。

5. 大谷探検隊将来 西域出土の唐代織物

龍谷大学図書館には大谷探検隊将来の織物が所蔵されている⁽⁴²⁾。これらには幡そのものは含まれていないが、幡に使用可能な織物が含まれており参考となる。筆者は、龍谷ミュージアムのご好意で、出陳中の大谷探検隊将来品のうち6点の唐代織物断片の実物を熟覧調査することができた。この中から、緯錦の「朱地連珠文鳥形文錦と白地連珠有翼羊文錦」と縷の「蘇芳^{すおう}地魚子^{じなこ}」の2点について、得られた知見を以下にまとめてみたい。これら2点を調査対象に選んだ理由は、緯錦は幡頭に、縷は幡身に使われる標準的かつ代表的な種類の織物であることによる。これらはいずれも第3次探検隊の橘瑞超と吉川小一郎がトルファン郊外の高昌故城のアスターナ遺跡⁽⁴³⁾から発掘したものである。現在、これらの織物断片はアクリル板2枚の中に挿入され、さらにアクリル板の外周は木枠に固定されている。

5.1 緯錦「朱地連珠文鳥形文錦と白地連珠有翼羊文錦」（図番号166）（図13）

2012年龍谷ミュージアム開催の特別展図録『仏教の来た道—シルクロード探検の旅』の説明文⁽⁴⁴⁾には「アスターナ出土、7世紀、シルク、織物サイズは上部3.6cm×3.7cm、下部9.6cm×7.3cm。副葬した俑の衣服にしていたと考えられている。連珠円文はササン朝に起源を持つと考えられる文様構成で、6世紀以降、西はビザンチン帝国、東は日本までユーラシア全体に広がったため、当時の東西文化交流を象徴する文様といえる。」とある。

この錦を仔細に観察すると、上部の「朱地連珠文鳥形文錦」（以下「朱地錦」と略称）と下部の「白地連珠有翼羊文錦」（以下「白地錦」と略称）とは、縫糸で丁寧縫い合わされている。織組織は「朱地錦」「白地錦」とも裏面を良く観察すると陰経糸と陰緯糸で綾織を構成しており、この綾織をベース組織とし、その上に多色の緯糸で文様を織り乗せた複様組織⁽⁴⁵⁾の綾織緯錦である。連

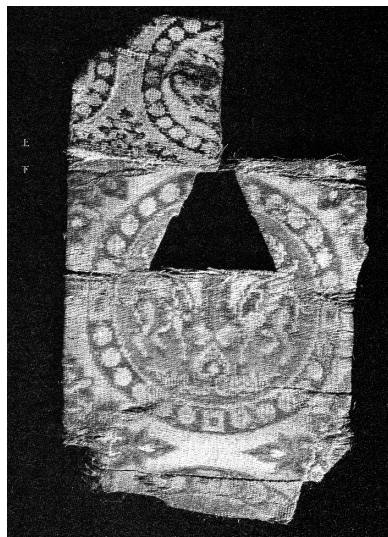


図13 朱地連珠文鳥形文錦と連珠有翼羊文錦

珠文の外径は「朱地錦」が約4cm、「白地錦」が約6.5cmであるが、文様の全体が見えないのでリピート(柄の大きさ)は不明であるものの、「朱地錦」では連珠紋の中に鳥を配し、「白地錦」では連珠紋の直径が大きく、有翼羊文様と花文様を配する複雑な文様となっている。織物表面の文様の織密度を実物について密度測定用ルーペで測定すると、「朱地錦」は経約24本/cm、緯約18本/cm、「白地錦」は経約21本/cm、緯約16本/cmで、「朱地錦」の織物の方がやや緻密となっている。何れも一般的な錦の織密度の範囲である。糸は「朱地錦」「白地錦」とも無撚のシルクの平糸である。緯糸の色数は褪色のため明確でないが、7～10色と推定される。

したがって、本緯錦は複雑な文様を多色の糸で織った高級織物であり、その製織には空引き機⁽⁴⁶⁾の使用を含む高度な文様製織技術が用いられたと考えられる。よって、前掲特別展解説書の説明文にあるように、連珠文様や有翼羊文様は西方起源の文様であるが、この織物自体は中国内地で織られ、トルファンにもたらされた可能性が強い。さらに、本緯錦のような高級織物を幡に使用する場合は、前章「4.3 錦幡頭幡」のように幡頭を飾る織物として用いられることが多い。

5.2 額額染^{すおうじなこ}「蘇芳地魚子」(図番号168)(図14)

2012年龍谷ミュージアム開催の特別展図録『仏教の来た道—シルクロード探検の旅』の説明文⁽⁴⁷⁾には「アスターナ出土、6世紀、絹、20.0cm×7.4cm。絞り染で本例は平絹を摘んで糸で縛って、朱色の染料で染めたもの。縛った部分が染まらず菱形に残っているため、このような魚子状の、鹿の子文様ができる。」とある。

この額額染⁽⁴⁸⁾布には、織物の左端に耳が残っていることから、経方向が図の上下方向になることがわかる。また、この耳部には、かつて他の織物と縫い合わされた痕と思しき縫い目の孔が残っている。織組織は平織で、厚めの縐である。密度測定用ルーペで測定した織密度は経約50本/cm、緯約70本/cmで密であり、糸は経・緯とも双糸である。ここから、次のような知見が得られる。すなわち、本額額染のような密な織密度では、布にしてから精練したのでは生糸を構成するタンパク質のセリシンが解けて隙間ができるため、練り糸を使うのが一般的である。したがって、双糸を用いるのは糸の段階での精練を容易にするためであったと考えられる。

また、前掲特別展図録の説明文では「絞り染」としか記していないが、以下の理由から額額染と考えられる。一見すると文様の魚子柄が矩形であり、かつ緯糸方向に一段ずつ一柄ずれて

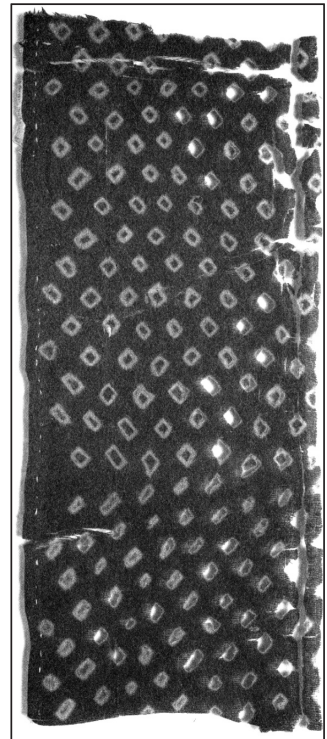


図14 額額染「蘇芳地魚子」

平行に並んでいることから夾纈染⁽⁴⁹⁾と見間違えるが、精査すれば各矩形の大きさが、正方形に近いものと縦横の比率の違う矩形が不規則に混在しており、一柄ごとに人手で括った纈纈染であることが明らかにみてとれる。夾纈や纈纈の絞り染をする布は平織が多く、無地の平織でありながら多彩な文様を表現できるという特徴がある。手で織物を括ってこのように矩形の先端部を直角にするには極めて高度な技量が要求されることから、品質の高いこの纈纈染は高級な絞り染であるといえる。蘇芳とは、染料として使うマメ科の植物名で赤色の色素を抽出して染料としたもので、これで染めた色名としても使う。

幡での用途としては、同じ平織りであっても厚みのある縑は幡頭あるいは幡身に、薄い縑は幡手や幡足として活用されていることが多い。本纈纈染布は厚めの縑であるから、幡であれば幡頭や幡身に使用し得る素材といえる。

以上、大谷探検隊将来のアスターナ出土の唐代織物片では、高度な製織技術と纈纈染技術を駆使していることを熟覧調査により確認できた。こうした高度な製織技術および染織技術を背景として、唐代の幡の生産が支えられていたといえよう。

6. おわりに

仏教荘厳具であり、かつ織物を素材とする幡に関する従来の研究は、ほぼ考古学的視点や染織史的視点によるものに限られてきたといつてよい。それに対し、本稿では、唐代の幡とその素材となりうる織物を対象に、幡の持つ品質に注目して研究を行った。

その結果、唐代の幡の形状的特徴は幡頭が正三角形であることを指摘し、幡に使用される唐代の織物名について、意味と属性を明らかにし、唐代における高級織物の生産地域について、文献資料をもとに整理した。

そのうえで、敦煌発見の唐代の幡の図版資料と、トルファン出土の唐代の染織品の実物資料について、筆者の見解をまとめた。すなわち、①幡頭には幡身などよりも高品質の織物が使用されること、②なかには、木綿や羊毛糸など中国内地では生産されていない素材が使用されているものが含まれること、③品質の高い秀品には多種類の高級織物を使用し、優れた縫製技術を示すものがあること、④染織の品質の違いから幡寄進者の身分の差がうかがえること、を具体的に指摘した。さらに、大谷探検隊が将来したトルファン出土の織物断片からは、複雑な文様を多色の糸により織り出すための空引き機の使用による高度な文様製織技術や、矩形の先端部を直角に染め出すというきわめて高度な纈纈染の技術が看取できることを指摘した。

今後は、これらの成果をもとにし、中国における近年の発掘品や日本国内に伝来する奈良時代の幡などにも広げてゆきたい。

〔付記〕本研究ノートは2015年12月に佛教大学に提出した修士論文の一部に、加筆訂正を加え

たものである。指導や助言を与えて下さった指導教員の大西磨希子教授を始とする大学院の各先生方や大学院生諸兄に深謝申し上げる。また、龍谷大学図書館所蔵の大谷探検隊将来品に関しては2015年5月と10月に龍谷ミュージアムにおいて熟覧調査する機会を与えて頂いたことに対し、深くお礼を申し上げる。 (完)

〔注〕

- (1) 例えば、岡田至弘「幡」(『仏教考古学講座』第11巻、雄山閣、1937年)、沢田むつ代『上代裂集成』(中央公論美術出版、2001年)など。
- (2) 筆者の繊維関連業務略歴は次の通り。国立京都工芸繊維大学工芸学部卒業。三菱レイヨン(株)24年間(商品開発・品質管理・海外技術指導)。相模(株)34年間(西陣織用生糸の企画・製造・販売と織物設計)。繊維部門技術士(文部科学省登録番号19581)32年間(西陣織と歴史的織物の研究・設計・試験・評価・指導)。
- (3) Mark Aurel Stein (1862-1943) ハンガリー生まれのイギリスの探検家、考古学者。1900年にニヤ遺跡(コータン近郊)の調査、さらに、1907年と1914年には敦煌莫高窟の調査を行い、多くの仏画、仏典、古写本を入手した。イギリスへの将来品は現在主に大英博物館に保管されている。その業績は自著の『古代コータン』、『セリンディア』、『極奥アジア』などに収められている。
- (4) Paul Pelliot (1878-1945) フランスの東洋学者。フランス極東学院教授、フランス学院教授を歴任。1906-1909年の3年間、中央アジア各地の遺跡を調査した。1908年には敦煌の千仏洞に赴き、アジアの諸国語に通じ、特に中国語精通の力量を生かして、逸品ぞろいの文書、遺品を選別収集し、将来した。将来品はパリ国立図書館とギメ美術館に保管されている。『敦煌千仏洞』のほか、著書、論文が多くある。
- (5) 浄土真宗本願寺派第22世法主・大谷光瑞(1876-1948)が組織した西域方面の探検隊。諸外国の探検隊と異なり、仏教徒で構成された探検隊であることに意義がある。1902～1914年間に3次に渉り仏教関係を対象とした調査を行った。梵語・ウイグル語等の仏典、仏像など膨大な文物を将来し、その主なものは1915年に『西域考古図譜』として公表した。将来品は財政的理由で中国、韓国、日本に分散したが、日本国内では現在、龍谷大学図書館、東京と京都の国立博物館等に保管されている。
- (6) 幡の語源については、①望月信亨編『望月仏教大辞典』第5巻(世界聖典刊行会、1958年)。幡は3841頁、幡は4254頁。②財団法人鈴木学術財団編『漢訳対照梵和大辞典』増補改定版(講談社、1979年)。Dhvaja は651頁、patākā は728頁。③Monier-Williams, “A Sanskrit-English Dictionary”, The University Press, Oxford: 1898, Dhvaja: p. 522, patākā: p. 581. ④諸橋轍次編『大漢和辞典』第4巻(大修館1968年)。幡は474頁、幢は475頁、等を参考にした。
- (7) 例えば、紀元前十五世紀頃の黄河流域殷遺跡出土の青銅器破片の文様(『世界美術全集』第12巻、図165、角川書店、1962年)、紀元前三世紀頃のナイル川流域ヒエラコンポリス出土のナルメー

- ル王のパレット（『世界美術全集』第20巻、グラビア18図、角川書店、1964年）など。
- (8) 例えば、Benjamin Walker, “Hindu World”, Allen & Unwin, London: 1986, Vol. II pp. 222-223 記載のドヴァジャロパナ (Dhvarajopana) の祭など。
- (9) 例えば、『長阿含經』卷第4の『遊行經』第2には「使末羅童子拏牀四角擎持幡蓋。燒香散華伎樂供養。」(大正1、27下)とあり、釈尊の遺体を幡で供養したことが見える。『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第38には「出拘尸城詣双林所。(中略)無數幢幡繒綵飲食奇珍。」(大正24、400中)とし、娑羅樹林に於ける釈尊の遺体の供養として多数の幡が捧げられたことを示している。
- (10) ①**降魔**については、『起世經』卷第8の「鬪戰品」に「至須彌山王頂上。在山東面。豎純青色難降伏幡。依峯而立。(中略)在其南面。豎純黃色難降伏幡。(中略)在其西面。豎純赤色難降伏幡。(中略)在其北面。豎純白色難降伏幡。依峯而立。」(大正1、253上)とあり、須彌山の頂上の東南西北の面に、それぞれ青・黄・赤・白の難降伏幡を建てて勝利したこと、および『維摩詰所説經』卷中の「仏堂品」の偈文に「摧滅煩惱賊。勇健無能踰。降伏四種魔。勝幡建道場。」(大正14、549下)とあり、降魔の際、勝幡を立てることが述べられている。②**供養や廻向**については、『雜阿含經』卷第23に仏教に帰依した阿育王が、「於此閻浮提。普立諸仏塔。種種諸供養。懸繒及幡幢。莊嚴世尊塔。妙麗世希有。」の偈を述べ、さらに「又作無量百千幡幢繒蓋。使諸鬼神各持舍利供養之具。」(大正2、165上)とあり、大量の幡を作って舍利供養を行ったことを述べている。また、『根本説一切有部尼陀那』卷第5の「尼陀那別門」第5第二子摂頌に「供養菩薩像。并作諸瓔珞。塗香及車輿。作傘蓋旗幡。」(大正24、434中)とあり、菩薩の供養のため幡を作ることが述べられている。③**功德**については、『仏説灌頂七万二千神王護比丘呪經』(灌頂經)卷第11に「若臨終時若已過命。是其亡日我今亦勤。造作黃幡懸著刹上。使獲福德離八難苦。得生十方諸仏淨土。」(大正21、530中)とあり、臨終後において懸幡による命過の功德があることを述べている。また、『釈迦譜』卷第5に阿育王について「王身有疾。伏枕慷慨曰。(中略)王体羸弊取幡不瞻。有諸比丘行助王取之。故今上幡先令比丘將之也。由是病癒增算十二。故因名為統命幡。」(大正50、79上)とあり、懸幡の功德によって王の寿命が12年延びたと記している。④**莊嚴**については、『大方廣仏華嚴經』卷第7の賢首菩薩品第8之2に「又放光明名雜莊嚴。以幢幡蓋而嚴飾。(中略)幢蓋幡帳供諸仏。因是得成莊嚴光。又放光明名端嚴。令十方地平如掌。」(大正9、437中・下)とあり、幡による莊嚴の様子が述べられている。『妙法蓮華經』の序品第1に「一一塔廟。各千幢幡。」(大正9、3中)とあり、『仏説無量壽經』巻上では、法蔵比丘の発願と修行に「其手常出無尽之寶。衣服飲食珍妙華香。諸蓋幢幡莊嚴之具。」(大正12、269下・270上)とあり、法蔵比丘が自在を得ていること、阿彌陀成仏と淨土の姿では「無量壽國其諸天人。衣服飲食華香瓔珞。諸蓋幢幡微妙音声。(中略)隨意所欲念即至。」(大正12、272上)と淨土の莊嚴を説き、さらに淨土に往生した者の得益として「隨心所念。華香伎樂繒蓋幢幡。無數無量供養之具。自然化生念即至。」(大正12、273下)としている。
- (11) 北魏代：敦煌第257窟南壁中央仏三像図、北周代：敦煌第428窟西壁中央南側金剛宝座塔、隋代：敦煌第305窟 西壁北側仏説法図、唐：敦煌出土絹本引路菩薩図。

- (12) 地理知識編集部『地理知識』1976年11期、梅方権「中国的綿花」(科学出版社、1976年)。
- (13) 慧琳編『一切経音義』(大正54、0312上～0932中)、希麟編『統一切経音義』(大正54、0934上～0979下)、義楚(釈氏)六帖』(朋友書店、1979年)、李隆基撰李林甫注『大唐六典』(三秦出版社、1991年)、倭名類聚抄』(『日本古典全集』正宗敦夫編纂校訂「倭名類聚抄」8～14巻、日本古典全集刊行会、1931年)。
- (14) 参照した辞典類 常沙娜主編『中国織繡服飾全集』第1巻1～21頁(天津人民美術出版社、2004年)、吴山主編『中国歴代服装、染織、刺繍辞典』(江苏美术出版社、2011年)、諸橋轍次編『大漢和辞典』(大修館書店、1968年)、日本織物新聞社編『増補染織辞典』復刻版(京都書院、1974年)。
- (15) 大正54、605 下。
- (16) 大正54、429下。
- (17) 大正54、584下。
- (18) 原文「古代絲織品名。絹、生白繒。以生絲為經緯、採用平紋或平紋變化組織的絲織物、質地提爽。」(『中国歴代服装、染織、刺繍辞典』江苏美术出版社、2011年、111頁)。
- (19) 大正54、955上。
- (20) 『新唐書』巻37地理志第27地理1～巻43地理志7(中華書局、959～1157頁)。
- (21) 原文「輕緯捻度很低的平紋薄型絲織物稱為紗。」(『中国織繡服飾全集』第1巻、天津人民美術出版社、2004年、348頁)。
- (22) 大正54、745中。
- (23) 『一切経音義』には3通りの記載がある。巻1には「案用二色彩絲織成文花次於錦厚於綾説文云有文繒也」(大正54、314中)、巻4には「以二色絲織為文花出異越次於錦也」(大正54、331下)、巻31には「綺有文繒也」(大正54、514下)とある。その意とするところは、文様は二色の色系で織った錦に次ぐレベルであり、綾よりも厚く、紋のある繒である。
- (24) 原文「綾是指在織物表面呈現疊山形斜路、(中略)產生在漢以前。唐宋是綾的極盛時期。」(『中国織繡服飾全集』第1巻、天津人民美術出版社、2004年、354頁)。
- (25) 原文「緞子是採用緞子紋組織的絲織物、緞子的經緯絲中只有一種顯現於織物表面、並遮蓋另一種均勻分布的組織点、所以織物表面光亮平滑、質地柔軟。緞起源於我国。史載唐已有錦緞子。」(『中国織繡服飾全集』第1巻、天津人民美術出版社、2004年、350頁)。
- (26) 原文「錦是多彩帝提花織物的泛称。伝統絲織中最絢麗華美的一種。(中略)錦有採用重經組織經絲起花的經錦、採用重緯組織的緯錦。漢代流行二色和三色經絲顯花的經糸錦。唐代出現了大量的緯錦、(中略)新疆吐魯番阿斯塔那唐墓出土的連珠紋錦、花鳥紋錦、都十分華麗。如連珠对鵝紋錦、連珠对雞紋錦、連珠鹿紋錦等、其中花鳥錦、極具唐代豐碩円潤の風格。」(『中国織繡服飾全集』第1巻、天津人民美術出版社、2004年、313頁)。
- (27) 空引き機は大柄の緯錦を織るための歴史的な大型の織機で、2人の織工が操作する。1人は織機の上(宮という)に座し、文様に応じて経糸を上下する操作を行う。他の1人は織機の手前に

座して、多色の緯糸を文様に応じて織り込む。19世紀初にパンチカードを使ったジャカード装置が発明され、これに取って代わられた。なお、西陣織会館(京都市上京区)には空引機が動態保存・展示され、実演もある。

- (28) 大正54、888下。
- (29) 大正54、926下。
- (30) 佐藤武敏『中国古代絹織物史研究』(風間書房、1978年)下第4篇第2章 唐代の生産、第1節 唐代の産地、2 貢負担の絹織物産地。(310～327頁)
- (31) 大正51、876中～947下。
- (32) 中国の繊維技術の発展に関しては、宋應星著、藪内清訳注『天工開物』(平凡社、1969年)、鞠清遠著、陶希聖校『唐宋官私工業』(新生命書局、1934年)、陳維稷主編『中国紡織科学技術史(古代部分)』(科学出版社、1984年)などの著書を参考にした。
- (33) Aurel Stein, “Serindia”, Vol.II, Clarendon: 1921, p. 791.
- (34) 例えば、F. H. Andrews, “Ancient Chinese Figured Silks excavated by Sir Aurel Stein”, *The Burlingong Magazine*, No.208, Vol.XXXVII-July, 1936.
- (35) 実物の織物からでなく、図版印刷した図面から織密度を測定するのは困難な作業で、かつ、得られた結果の信頼性も高くない。今回は、西域の幡として取り上げたスタイン2点とペリオ1点の幡は、印刷図面を高解像度スキャンし、画像処理ソフトで織目が可能な限り浮き出るように処理した画像を用いた。なお、大谷探検隊将来品2点の織密度は熟覧調査で実物を直接測定した結果で、信頼性は高い。
- (36) 古代に行われた布を絞りに染める技法には、①^{こうけちそめ}纈染、②^{きょうけちそめ}夾纈染および③^{ろうけちそめ}蠟染があり、三纈と呼ぶ。①^{こうけちそめ}纈染は布の染めない部分を摘み上げ、強い糸で強く縛ってから染液内に浸し、縛った部分に染液が浸み込まないように防染して染める方法である。単色染めが多い。②^{きょうけちそめ}夾纈染は色別に文様を彫抜いた板の間に、折り畳んだ布を挟み、強く縛り付けて板で防染し、彫抜いた所から染料を流し込み、染料が繊維に固着すれば、洗浄乾燥する。これを所定の色数毎に繰り返し色付き柄を得る。③^{ろうけちそめ}蠟染は蠟で防染する方法で、布の上に蠟で囲った文様を描き、その部分を防染して染める。蠟で囲った文様毎に異なる色の染料を塗り、乾燥後、その部分を蠟で塗り覆ってから染浴で染織すると多色の染色が可能である。
- (37) 原本はMission Paul Pelliot, “Bannières et Peintures de Touen-Houang”, Vol.XIV, Adrien-Maisonneuve, en vente: 1974, p. 314.
- (38) Mission Paul Pelliot, “Tissus de Touen-Houang” Vol.XIII, Adrien-Maisonneuve, en vente: 1970.
- (39) Aurel Stein, “Serindia”, Vol.II, Clarendon:1921, p. 1012.
- (40) 錦織では、柄を織り出す柄糸が柄に応じて表面に多く浮き出てくるので、織物が安定しない。そこで、経錦では「陰経糸」、緯錦では「陰緯糸」を表面の文様に影響しないよう同時に織り込んで、織物を安定させる。この組織を複様組織と呼ぶ。陰経、陰緯は柄糸を平組織か綾組織で結ぶことが多い。

- (41) 例えば、①日本繊維機械学会繊維工学刊行委員会編『繊維工学』III「糸の製造・性能および物性」(日本繊維機械学会、1987年)の302～327頁、②繊維学会編『繊維便覧』第2版(丸善、1994年)152頁(繊維の性質とその測定)など。
- (42) 龍谷大学龍谷ミュージアム特別展『仏教の来た道-シルクロード探検の旅』(読売新聞社、2012年)。
- 龍谷大学図書館の所蔵品に関して次の先行研究がある。織物技術の研究では、佐々木信三郎「上代錦綾特異技法攷」『川島織物研究所報告』第5報(川島織物、1973年)。また、龍村平蔵(龍村織物)『錦とボロの話』(学生社、1967年)144頁には、織物をアクリル板に挟んで保存する前の折り畳んだ状態を展延し、分類し、調査したときの記録があり、本書が歴史的織物の啓蒙書であるにも関わらず、この部分は織物技術者として専門的に記述している。織物史の研究では、横張和子「複様平組織の緯錦に付いて—大谷探検隊将来絹資料の研究—」(『古代オリエント博物館紀要』13号、1990年)、横張和子「大谷探検隊将来絹資料の研究その2 錦と羅」(『古代オリエント博物館紀要』16号、1995年)。坂本和子『織物に見るシルクロードの文化交流 トルファン出土の染織資料—錦綾を中心に』(同時代社、2012年)などがある。
- (43) アスターナ古墳群は高昌城住民の墓地遺跡で、現在のトルファン市東南35kmにある。
- (44) 龍谷大学龍谷ミュージアム特別展『仏教の来た道-シルクロード探検の旅』(読売新聞社、2012年、155頁、図番166の解説)。
- (45) 前掲注(40)を参照。
- (46) 前掲注(27)を参照。
- (47) 龍谷大学龍谷ミュージアム特別展『仏教の来た道-シルクロード探検の旅』(読売新聞社、2012年、155頁、図番168の解説)。
- (48) 前掲注(36)を参照。
- (49) 前掲注(36)を参照。

[図版出典]

※図1、図4、図5を除き、原本のカラー図版を白黒図版に加工した(2017年加工)。

図1 筆者描図(2001年描図)

図2 東大寺聖武天皇祭 南大門前で筆者撮影(2008年撮影)

図3 **北魏** 敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟』第1巻 図40(平凡社、1980年)、**北周** 同編『中国石窟 敦煌莫高窟』第1巻 図165(平凡社、1980年)、**隋** 同編『中国石窟 敦煌莫高窟』第2巻 図27(平凡社、1981年)。**唐** 『西域美術 ギメ美術館 ベリオ・コレクション』第2巻 図69-1(講談社、1995年)。

図4 筆者描図(2015年描図)

図5 石見清裕「唐の絹貿易と貢献制」『九州大学東洋史論集』33号(2005年)の図1(65頁)を参考に筆者作図。

- 図6 『西域美術 大英博物館スタイン・コレクション』第3巻 画像番号12(講談社、1984年)
図7 図6を筆者加工描図(2015年描図)
図8 図6を筆者加工描図(2015年描図)
図9 『西域美術 ギメ美術館ペリオ・コレクション』第2巻画像番号35(講談社、1995年)
図10 図9を筆者加工描図(2015年描図)
図11 前掲書(図6)第3巻 画像番号11-1
図12 図11を筆者加工描図(2015年描図)
図13 特別展『仏教の来た道-シルクロード探検の旅』155頁 図番号166(龍谷大学龍谷ミュージアム
読売新聞社、2012年)
図14 前掲書(図13)155頁 図番号168

【参考文献】

- (1) 大西磨希子『唐代仏教美術史論考』(法蔵館、2017年)
(2) 長沢和俊、横張和子『シルクロード染織史』(講談社、2001年)
(3) L.Boulnois 著長澤和俊・伊藤健司訳『シルクロードー絹文化の起源をさぐる』(河出書房新社、
1980年)
(4) R.Whitfield and A.Farrer, “Caves of Thousand Buddhas”, British Museum, 1990.
(5) 川島織物研究所報告『上代裂組織研究』(川島織物 1951年 非売品)
(6) 中国歴史博物館著 蔡敦達訳『中国古代科学技術展図録』(奈良シルクロード博覧会)(大広、
1988年)
(7) 布目順郎『絹と布の考古学』(雄山閣出版、1988年)
(8) J.Gillow and B.Sentance, “WORLD TEXTILES: A Visual Guide to Traditional Techniques”,
Thames & Hudson Ltd, 1999.
(9) 奈良文化財研究所編『絹文化財の世界』(角川学芸出版、2005年)
(10) 『日本の美術』542号 伊藤信二「幡と華鬘」(ぎょうせい、2011年)

(さがみ たいぞう 文学研究科佛教文化専攻修士課程修了)

(指導教員：大西 磨希子 教授)

2017年9月29日受理